

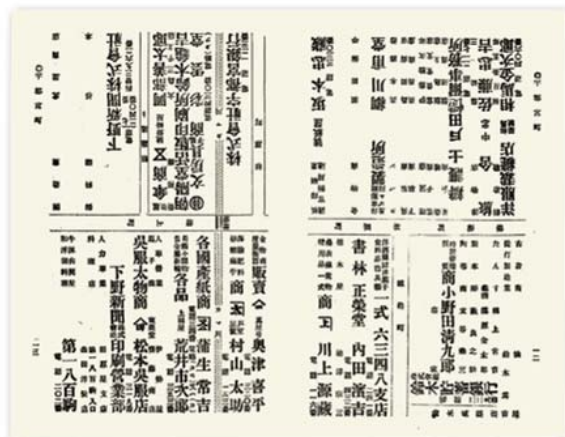
Once upon a time in Utsunomiya

一枚の絵葉書から 石井敏夫コレクションより 第51回

宇都宮市全景

宇都宮は、一八八四(明治十七)年の県庁移庁を皮切りに、翌八五年七月の宇都宮駅開業(日本鐵道奥州線)、そして一八九六(明治二十九)年四月の市制施行を経て、名実ともに栃木県の県都として成長を遂げた。市制施行当時の総面積は一万七九〇平方キロ、町数三十六、人口三万五千二百三十三人、戸数六千九百九十二戸。宇都宮市より人口の多い都市は、東京、大阪、京都を除けば、全国で十六市に過ぎなかった。

人口の増加と市街地の拡大は、商工業の活性化を促し、政府による殖産興業政策は多くの企業を誕生させた。市制施行の翌年には宇都宮軌道運輸会社による西原町〜荒針間が開業、一八九八(明治三十一年)年には栃木農工銀行が設立。一九〇〇(明治三十三年)年六月には、宇都宮電灯会社が設立され市内に電力供給を開始するなど経済の発展と市民生活の向上には目を見はるものがあった。



『栃木縣營業便覽』(明治40年)より

『宇都宮市史』によれば、同年における企業会社数は十七社。内訳は、株式会社十二、合資会社四、合名会社一と記されている。

下記に掲載した二枚の絵葉書は二荒山神社境内から市内を見渡したものの。明治三十年代後半から四十年代前半の風景と思われる。瓦屋根の家屋や土蔵造りの商家、大谷石の石蔵などが隙間なく建ち並ぶ様が見てとれる。電柱が建つあたりが大通り。



(四三番町下野新聞) Whole View of Utsunomiya

(二枚) 最全市宮都宇

(四三番町下野新聞) Whole View of Utsunomiya

(一枚) 最全市宮都宇